

「プラナリアの新しい餌(3)」

お茶の水女子大学附属小学校 田中 千尋

冬休み中は、北軽井沢に行くときも、小川町(親戚が多い)に行くときも、必ず「プラナリア同伴」であった。150匹ほどを、密閉式の蓋がついた、ガラス容器に入れてある。豚レバーを凍ったまま持ち歩くのに、非常に苦労した。しかし、この「ワンちゃんビーフジャーキー」を食べてくれば、革命的に楽になる。



さっそく1粒与えてみた。簡単に水に沈んだ。しかし、三善英史状態だ。「♪プラナリア～は 誰一人と～ 見向きもしない～い～」やはりダメか・・・?



実はプラナリアは、普段とちがう餌を与えると、最初は見向きもしないことが多い。ホタテガイを与えた

時は、慣れるのに数日かかった。しかし、この餌は1時間後には、寄りつき始めた。肉片が水を吸って少し膨張した頃である。どうも、数匹が寄りつくと、多くの個体が、一気に餌に向かって集まってくる行動をしているように見える。或いは何かしらの、指向性のある化学物質を放出して、容器内に濃度勾配ができて、仲間を呼び集めているのかも知れない。



これが、餌を与えてから2時間後の状態。ものすごい大人気になった。ほとんどのプラナリアが球状に集まっている。豚レバーを与えた時と全く同じ状態だ。



その後も「プラナリア連」はなかなか餌から離れず、やっと閑散としたのは、実に5時間後だった。5時間たったのに、水はほとんど濁っていないし、油脂も浮いていない。豚レバーだったら、そろそろ水が腐り始めている頃だ。これはもう、大成功と言えるだろう。